

森林管理署長が語る！

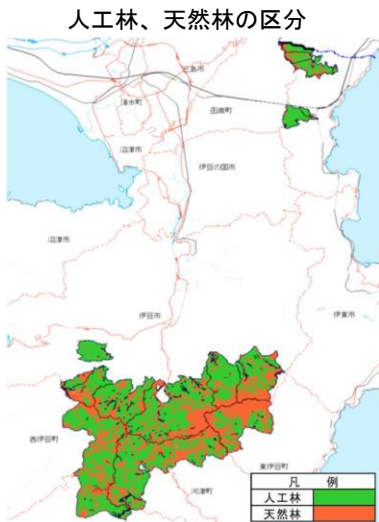
伊豆森林管理署長 岩崎 利行

➤ はじめに

1 管内概要

伊豆森林管理署は、静岡県東部に位置し、伊豆半島の5市（熱海市、伊豆市、伊豆の国市、伊東市、下田市）6町（河津町、函南町、西伊豆町、東伊豆町、松崎町、南伊豆町）を管轄としています。

管内の国有林は伊豆半島最高峰の万三郎岳（1,406m）をはじめとする天城山系を中心とした地域と熱海地域とに分布しています。



国有林の約75%はスギ、ヒノキを主体とする人工林となっており、標高千メートルを超える天城山系の稜線部を中心に、太平洋側では珍しいブナ林にヒメシヤラなどが混じる天然林も分布しています。

海に囲まれた半島中央部に山々がそびえる地形から、我が国有数の多雨地帯（2008年以降、毎年、年間降水量4,000mm越え。）となっており、伊豆半島の主要河川である狩野川、河津川、仁科川等の源流部に位置する国有林から流れる豊富な水は、下流域の生活用水や伊豆名産のわさび栽培のほか農業用水等に利用されています。

管内市町の概要

単位 面積：ha 比率：%

区 分	土地面積 ①	森 林 面 積			森林比率 ②/①×100	森林比率内訳	
		総数 ②	国有林 ③	民有林 ④		国有林 ③/①×100	民有林 ④/①×100
総 数	129,282	96,455	17,361	79,094	75	13	61
熱海市	6,170	3,866	983	2,883	63	16	47
伊豆市	36,397	29,899	7,901	21,998	82	22	60
伊豆の国市*	9,462	5,208	194	5,014	55	2	53
伊東市*	12,402	6,867	26	6,841	55	0	55
下田市*	10,438	7,918	195	7,723	76	2	74
河津町	10,069	8,253	3,269	4,984	82	32	49
函南町	6,516	3,571	0	3,571	55	0	55
西伊豆町	10,541	9,411	2,428	6,983	89	23	66
東伊豆町	7,782	5,776	1,612	4,164	74	21	54
松崎町	8,511	7,146	685	6,461	84	8	76
南伊豆町*	10,994	8,539	67	8,472	78	1	77

(注) 1 土地面積は、国土地理院「令和6年全国都道府県市区町村別面積調」による。

2 民有林の森林面積は、「令和4年度静岡県の土地利用（静岡県交通基盤部）」による。

3 *印の市町の国有林面積は官行造林地のみ面積。

4 河津町、東伊豆町、西伊豆町の国有林面積は官行造林地面積を含む。

5 四捨五入の関係で総数の計は一致しない。

2 天城山（あまぎさん）

天城山は伊豆半島中央部の東西に広がる連山の総称で、東から遠笠山（1,197m）、万二郎岳（1,299m）、伊豆半島最高峰の万三郎岳（1,406m）等が連なっています。天城山という名の山は存在しません。

天城連山には多くの登山道・遊歩道があり、中でも天城シャクナゲコースは5月中旬～6月初旬になるとコース名のとおりアマギシャクナゲ（伊豆半島固有種）が見ごろになり多くの登山客が訪れます。



万三郎岳案内表示



アマギシャクナゲ

3 伊豆市のわさび田

伊豆市の特産物である「わさび」は1744年、伊豆市天城湯ヶ島の山守であった板垣勘四郎がしいたけ栽培の指導者として現在の静岡市葵区有東木を訪れた際、お礼にわさび苗を持ち帰り天城湯ヶ島に植えて栽培したことにより始まったとされています。

伊豆市内の多くのわさび田が、国有林内又は国有林に隣接しています。

戦後、1946年（昭和21年）の「自作農創設特別措置法」制定に伴う農地政策の一環として、昭和23年に国有地から民有地とされたところです。



国有林に隣接するわさび田

このため、国有林内の林道からわさび田につながるモノレール敷等の貸付業務、わさび

田日陰支障木の販売、台風時等における国有林からの倒木処理、国有林内からの土砂流入対策、わさび田上流域における生産事業のわさび田生産者との調整等、わさび生産者との関係が深いことから、今年度より、わさび生産組合、JA、伊豆市との意見交換会の場を設け地元とのつながりを大切にしているところです。

静岡水わさびの伝統栽培は平成30年に世界農業遺産に認定（静岡市、伊豆市、下田市、河津町、松崎町、西伊豆町、東伊豆町）されています。なお、平成29年には日本農業遺産に認定（世界遺産認定地域＋浜松市、富士宮市、御殿場市、小山町）されています。

伊豆地域のわさびは、天城山系を中心とした国有林から湧き出る豊富な水により育ち、国内だけでなく欧米や韓国、中国など海外からの需要が増加しています。

4 狩野川（かのがわ）



狩野川（修善寺橋から下流方向）

狩野川は、天城峠を源流とする本谷川と猫越（ねっこ）岳（1,035m）を源流とする猫越川が合流する地点から沼津市において駿河湾へ注ぐ延長約46kmの一級河川で、太平洋側では珍しく南から北へ流れる川です。

狩野川はアユの友釣り発祥の地とされています。

諸説ありますが、江戸時代、韮山代官所へ「最近流行り始めた罟を使う新漁法で鮎を根こそぎとるので困っている」という訴状が見つかったことから鮎の友釣りが狩野川流域で初めて行われたとされています。

5 滑沢（なめさわ）溪谷

滑沢溪谷は伊豆市の湯ヶ島国有林内にあり一般に開放されています。

溶岩が谷を埋め、水により磨き上げられた全長500mの安山岩の1枚岩が見事です。

アクセスは、伊豆箱根鉄道駿豆線の終着駅である修善寺駅からバスで約40分「滑沢溪谷」下車後徒歩15分のところにあります。

この滑沢溪谷には遊歩道があり、遊歩道沿いを上流に行くと火山活動による土石流の跡や天城山の巨木「天城太郎杉」（歴代署長記載）を見ることができます。



6 大平中間土場

伊豆地域には市場や大型需要先、集積・貯木場がなく、山から搬出先までの輸送・搬出コストが大きなネックとなっていました。

つまり、これまで国有林から生産された木材は静岡県富士市の静岡県森連富士事業所まで搬出しなければならず、国有林材を買い付けたい伊豆の地元業者は富士事業所まで入札に行かなければならないという不便さがありました。



委託販売材

これらの課題解決に向け、伊豆市の協力を受けながら伊豆地域の林業の中核的な拠点として生産・流通を効率化するため、伊豆市大平地区に令和5年1月に敷地面積約19,000㎡の静岡県森連富士事業所大平中間土場が完成しました。

昨年度から国有林材はこの中間土場に搬出され委託販売を行うこととなり、不便さが解消されています。

➤ 伊豆署の特徴

1 職員実行による有害鳥獣（ニホンジカ）捕獲

伊豆地域は、中央部の天城山系の稜線以外ではほとんど積雪はなく、温暖な気候であるため、古来よりシカが生息していました。伊豆と富士では遺伝的に個体群が違い、体の大きさも伊豆の方が小さいとされています。



静岡県の第二種特定鳥獣管理計画（ニホンジカ・第5期）によると、捕獲頭数に基づく階層ベイズ法※による伊豆地域のシカの推定生息頭数は平成27年度に約39,000頭であったものが令和2年度には約29,000頭に減少しています。これは管理捕獲によるシカ捕獲頭数の増加によるものですが、生息密度はkm²当たり約30頭と依然として高く、ワサビの葉やシイタケの食害、国有林内ではスギ、ヒノキの剥皮などの被害が出ている状況です。

このため、伊豆地域における県の管理目標（第5期）では、生息頭数4,666頭、生息密度3～5頭/km²と目標を設定し管理捕獲の対策を進めているところです。

このことから、伊豆署の課題として伊豆地域の生息頭数、生息密度減少のため国有林内において、職員全員が罠研修を受講して署全体でシカ捕獲に取り組む体制を構築するとともに、ワサビ生産組合にシカ捕獲のための罠の貸出を行いワサビの葉の食害の軽減にも寄与しています。



シカによる剥皮

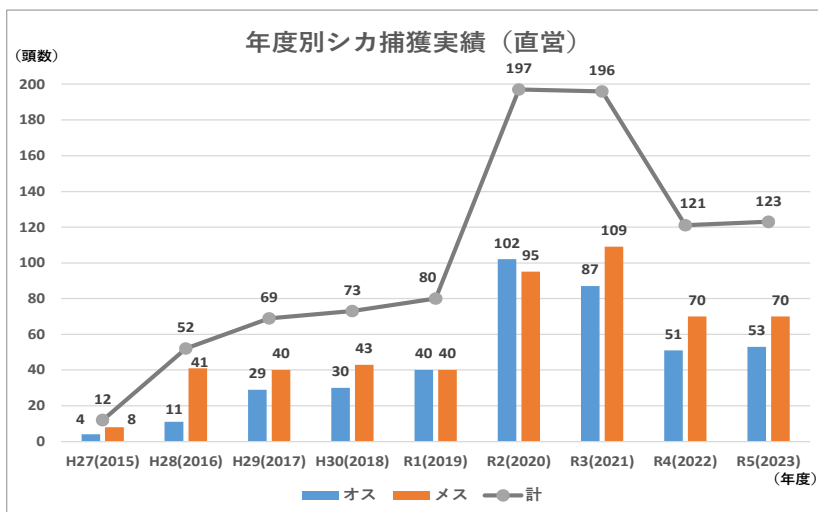
シカを捕獲するためには、餌付け（1か月前頃から）、罠設置、保定、止め刺し、運搬・埋設と工程があります。

当然、シカを殺めることから、毎年、捕獲前には全職員にシカ捕獲に関する各工程の「できる・できない」のアンケートをとり職員個人の意向を確認し、強制的にならないようシカ捕獲に取り組むこととしています。

※：モニタリング結果や捕獲効率などのデータを収集・蓄積し、すべてのデータに最も合理的に当てはまる個体数を推定する統計手法。当計画では、糞粒法による生息密度、狩猟期間中の目撃効率、捕獲頭数のH19～R2の14年間分のデータ。

伊豆署では平成27年度に試行、平成28年度から本格的に捕獲を実施しています。昨今は120頭ほどシカを捕獲しています

が、捕獲頭数を伸ばすためには、罠から逃げた経験のある非常に警戒心の強いシカ（いわゆるスレジカ）の捕獲手法を検討する必要があります。



2 生態系の保護

管内では生物群集保護林1か所と希少個体群保護林8か所、計9箇所、約860haの保護林を設定し、適切に保護・管理を図っています。ここでは保護林のうち代表的な2箇所の保護林についてご紹介します。

(1) 八丁池・^{かわごだいら}皮子平生物群集保護林(約716ha)

八丁池は約80万年~20万年前の噴火でつくられた天城山の稜線上、標高約1,170mに位置し、モリアオガエルの



ブナとヒメシャラ

の産卵地としても知られています。過去には火口湖と言われたこともありましたが、現在では断層のずれによって窪地に水がたまった池と明らかになっています。

八丁池は周囲が八丁(870m)あることからその名が付けられています(実際は約560mしかありません)。

八丁池の周辺はブナを主体としてヒメシャラが混生している天然林です。

皮小平は伊豆半島ジオパークHPによれば、約3,200年前に起きた伊豆東部火山群の中でも最大規模の火口です。伊豆半島最高峰の万三郎岳から八丁池へ向かう途中に位置しています。この地には天城山随一の大ブナがあります。

皮小平はモミやブナを主体とする天然林です。特にブナ林の中に多くのヒメシャラが生育する群落は、他に見られない特殊なタイプのブナ群落です。

(2) しらぬたの池モミ・スギ希少個体群保護林(約40ha)

しらぬたの池は万三郎岳の南、標高約640mに位置し、伊豆半島ジオパークHPによれば、浸食による地滑りでできた窪地に水が溜まってできた池と考えられています。八丁池ほどの大きな池ではありません。



シラヌタの大杉

「しらぬたの池とその周辺の生物相」は静岡県の天然記念物に指定されており、モミ・スギ等の針葉樹とケヤキ等の広葉樹が混交する天然林です。

付近には、林野庁の「森の巨人たち百選」にも選定されている、シラヌタの大杉(幹周81.5、樹高45m)を見ることができます



八丁池(ドローンによる空撮)



➤ おわりに

はじめには主に伊豆市内の観光地等を紹介しましたが、このほかに1905年（明治38年）に開通した現存する石造トンネルでは国内最長（全長446m）の「天城山隧道」や国有林に隣接する「浄蓮の滝」、当署の関連資料を展示している自然休養林内施設にある「昭和の森会館」等があります。また、管内には明治日本の産業革命遺産として世界遺産に登録された「韮山反射炉」等、伊豆半島には多くの見どころがたくさんありますので、お近くにお越しの際はぜひ立ち寄ってみてください。



伊豆半島には20,000頭以上のシカが生息していると言われています。森林だけではなく署近くの狩野川の川岸でもシカを見ることがあります。

静岡県の第二種特定鳥獣管理計画（ニホンジカ）（第5期）によると、伊豆地域のシカの個体群は独立した個体群であり、静岡県単独で対策を講じることができることから、他の地域に先駆けて、2004年（平成16年）に特定計画を策定し、以降、2012年（平成24年）に静岡県内を全域とした管理計画となり、現在に至っています。

伊豆半島では依然として生息密度が高いことから、シカ対策を民有林だけの問題とせず、国有林においても管理計画に寄与するため、職員一丸となってシカ対策を進めているところです。そのためには、まずは安全第一で実行するよう心掛けています。